

4 アドレナリン自己注射薬(商品名「エピペン®」)の取り扱いについて

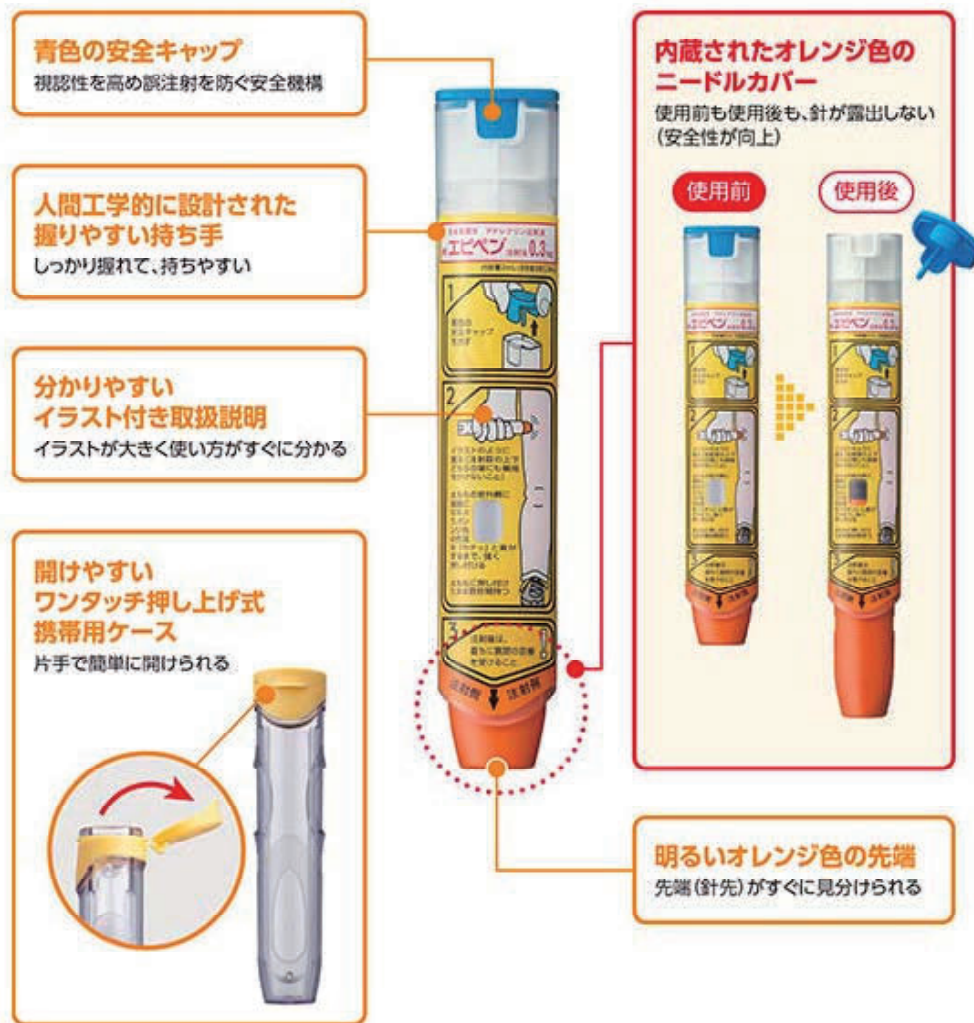
(1) 「エピペン®」とは

エピペン®は、アナフィラキシーを起こす危険性が高く、万一の場合に直ちに医療機関での治療が受けられない状況下にいる者に対し、事前に医師が処方する自己注射薬である。医療機関での救急蘇生に用いられるアドレナリンという成分が充填されており、患者自らが注射できるように作られている。このため、患者が正しく使用できるように、処方に際して十分な患者教育が行われていることと、それぞれに判別番号が付され、使用した場合の報告など厳重に管理されていることが特徴である。

エピペン®は医療機関外での一時的な緊急補助治療薬であるため、万一、エピペン®が必要な状態になり使用した後は、速やかに医療機関を受診しなければならない。

● エピペンの特長

「エピペンガイドブック」ファイザー株式会社より引用



【 エピペン®注射液0.3mg 】



【 エピペン®注射液0.15mg 】



(2) 「エピペン®」の使用について

エピペン®は本人、もしくは保護者が自ら注射する目的で作られたもので、アナフィラキシーショック症状が進行する前の初期症状（呼吸困難などの呼吸器症状が出現したとき）のうちに注射することが効果的であるとされている。しかし、アナフィラキシーの進行は一般的に急速であり、エピペン®が手元にありながら症状によっては児童生徒が自己注射できない場合も考えられる。その場合、アナフィラキシーの現場に居合わせた教職員には、エピペン®を自ら注射できない状況にある児童生徒に代わってエピペン®を注射することが求められる。そのため、エピペン®の取り扱いについては、主治医、保護者、学校（学校医・学校薬剤師）の三者で協議することに努め、情報の共有化を図る。学校がエピペン®を取り扱えるのは次の場合とする。

- 学校生活管理指導表により、事前に関係者で話し合い、学校での対応を決めている場合。
- 対象児童生徒、保護者は無論のこと、教職員も対応の仕方（エピペン®に関する一般的知識、注射の方法、投与のタイミングなど）の指導を事前に受けている場合。

（医師法等の解釈について）

アナフィラキシーの救命の現場に居合わせた教職員が、エピペン®を自ら注射できない状況にある児童生徒に代わって注射することは、緊急やむを得ない措置として行われるものであり、反復継続する意志がないものと認められ、「ガイドライン」（平成20.3.31）において示している内容に即して注射するものであれば、医師法第17条の違反にならないとされている。

また、刑事・民事の責任についても、人命救助の観点からやむを得ず行った行為であると認められる場合には、関係法令の規定（民法第698条・刑法第37条）によりその責任が問われないものとされている。

① 投与のタイミング

アナフィラキシーショック症状が現れたら、30分以内にアドレナリンを投与することが生死を分けると言われており、投与のタイミングについては事前に処方医から十分な指導を受けておく。

下記の投与基準は、日本小児アレルギー学会が提唱する一般向けエピペン®の適応基準である。

迷ったら
打つ！

一般向けエピペン®の適応（日本小児アレルギー学会）

エピペン® が処方されている患者でアナフィラキシーショックを疑う場合、下記の症状が一つでもあれば使用すべきである。

消化器の症状	・ 繰り返し吐き続ける	・ 持続する強い(がまんできない)おなかの痛み	
呼吸器の症状	・ のどや胸が締め付けられる	・ 声がかすれる	・ 犬が吠えるような咳
	・ 持続する強い咳き込み	・ ゼーゼーする呼吸	・ 息がしにくい
全身の症状	・ 唇や爪が青白い	・ 脈が触れにくい・不規則	
	・ 意識がもうろうとしている	・ ぐったりしている	・ 尿や便を漏らす

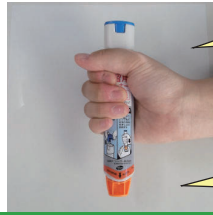
- 注射の前には緊急時の連絡をし、保護者に相談するとともに、救急車の要請を行う。
- アナフィラキシーではないのに誤ってエピペン®を打った場合には、ほてり感や心悸亢進(心臓がドキドキする)等の症状が起こるが、あくまでも一時的な症状で、15分ほどで元の状態に戻る。

② 「エピペン®」の使用手順

それぞれの動作を声に出し、確認しながら行う

① しっかり握る

オレンジ色のニードルカバーを下に向け、
利き手で持つ

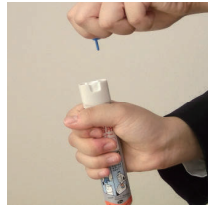


グーで握る

- ・オレンジ色のニードルカバーの先端は、指や手などで触れたり触ったりしない。

② 安全キャップを外す

青い安全キャップを外す

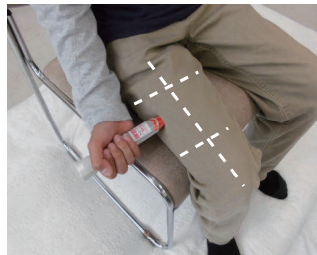


- ・服の上からも打つことができる。
- ・縫い目がないことや、ポケットの中身を確認する。

③ 太ももに注射する

【座位の場合】

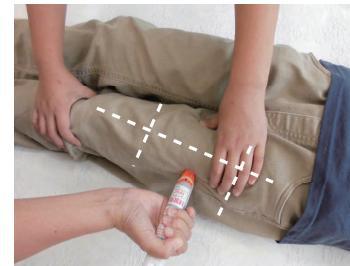
太ももの付け根と膝の中央部で、かつ真ん中よりやや外側に注射する。



エピペン®の先端（オレンジ色の部分）を軽くあて、「カチッ」と音がするまで強く5秒間押し付ける。（そのままゆっくり「10」数える。）

【仰向けの場合や本人が注射できない場合】

介助者は、子どもの太ももの付け根と膝をしっかりと押さえ、動かないように固定する。



- ・振り下ろして使わない！
- ・注射した後、すぐに抜かない！

ゆっくり

「1・2・3……8・9・10」

伸びていない場合は③にもどる。

④ 確認する

エピペン®を太ももから離し、オレンジ色のニードルカバーが伸びているか確認する。



使用前

使用后

- 注射した部位を10秒間マッサージする。
- 使用済みのエピペン® はケースに戻し、救急隊に渡す。

③ 「エピペン®」の管理について

緊急時にエピペン®を迅速に注射するためには、児童生徒本人のカバンやランドセルの中に携帯・保管することが基本である。しかし、低年齢等で管理上の問題などの理由により保護者から薬の保管を求められた場合には、保護者を交えて校内で検討し、学校が代わってエピペン®を保管・管理する。その際は、下記の点に注意する。

- エピペン®の保管場所については、主治医や学校医、保護者などの意見を踏まえながら、適切な場所（職員室・保健室・教室の決められた場所など）で保管・管理することとし、校内の全教職員がその保管場所を知っておくようにする。
- エピペン®は光で分解しやすいため、携帯用ケースに収められた状態で暗所に保管する。
- 保管にあたっては、15～30℃で保存することが望ましいことから、冷蔵庫に入れたり、日光の当たる高温下に放置しないこと。
- 使用期限に注意する。



「エピペンガイドブック」ファイザー株式会社より引用

④ 教職員全員の共通理解(緊急時の備え)

エピペン®を処方されている児童生徒が在籍している場合は、全教職員で以下の事柄について確認しておく。

- 食物アレルギーによる緊急時の対応の流れ
- エピペン®の保持者と保管場所
- 緊急時対応に必要な書類一式の保管場所
- エピペン®を注射するタイミングと方法

「エピペン®」 Q & A

エピペン®は、ズボンの上からでも注射
できますか？

打てます。 エピペン®は、衣類の上から注射することもできますので、ズボンなどは無理に脱がせなくても大丈夫です。

ただし、注射部位をさわって、縫い目がないこと、ポケットの中に何も無いことを確認しましょう。



エピペン®は、お尻や腕に注射しても大丈夫
ですか？



だめです。 注射する場所によってアドレナリンの吸収速度が違ってきます。太ももの外側が、一番吸収が早いと報告されています。ですので、お尻や腕には絶対に注射しないでください。

もし、誤ったところにエピペン®を使用してしまったら、ただちに最寄りの医療機関を受診してください。

初発のアナフィラキシーショックを起こした児童生徒に、別の児童生徒
のエピペン®を使用することはできますか？

使えません。 エピペン®注射液は、体重や既往症等に応じて使用量が変わるため、原則として処方されている本人しか使用できません。

初発のアナフィラキシーショックの場合、エピペン®を処方されていない場合が多いので、直ちに救急車を要請する必要があります。(p. 40 参照)

エピペン[®]を注射したあと、歩いて救急車に乗せても大丈夫ですか？

その場で待ちます。 立たせたり歩かせたりせず、その場で安静を保ち救急隊を待ってください。

- ・ぐったりしたり、意識がもうろうとしている → あお向けで足を高くする。
- ・吐き気やおう吐がある → 体と顔を横に向ける。
- ・呼吸が苦しく、あお向けになれない → 上半身を起こし、後ろに寄りかからせる。

修学旅行で飛行機に搭乗します。エピペン[®]はどうしたらよいですか？

エピペン[®]は必ず携帯して、飛行機に搭乗してください。

ただし、航空会社によっては、エピペン[®]を機内に持ち込む際に、主治医の「証明書」が必要な場合があります。事前に利用する航空会社に連絡し、所定の手続きを行ってください。

エピペン[®]が2本処方されました。学校と自宅に1本ずつ保管しておけば、普段は携帯しなくてもよいですか？

だめです。 エピペン[®]は必要に応じて処方されます。

登下校中や外遊びの際にエピペン[®]が必要となることもあるかもしれませんので、エピペン[®]は、必ずどこに行くときも携帯するようにしましょう。特に、登下校や遊びに行くとき、学校外での部活動、遠足等では忘れずに持参してください。

参考：「エピペンガイドブック」ファイザー株式会社（2015年4月作成）
「アナフィラキシーってなあに」<http://allergy72.jp/> より引用